

東京藝術大学 奏楽堂 モーニング・コンサート Morning Concert

第 4 回

2026年 6 月18日(木)

指揮：山下一史

藝大フィルハーモニア管弦楽団

戸田晴花（ヴァイオリン）

ベルク：ヴァイオリン協奏曲＜ある天使の思い出に＞

坂本郁生（ピアノ）

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第1番 嬰へ短調 作品1

19：45開演 東京藝術大学音楽学部第6ホール

主催：東京藝術大学音楽学部・東京藝術大学演奏芸術センター

◆戸田晴花（4年：ヴァイオリン）TODA Haruka

ベルク：ヴァイオリン協奏曲＜ある天使の思い出に＞（演奏時間約27分）

2004年兵庫県生まれ。

東京藝大ジュニア・アカデミー、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、現在、東京藝術大学4年次に在学中。高等学校卒業時に学部長賞、大学内にて安宅賞受賞。

第71回全日本学生音楽コンクール大阪大会第1位。

第23回大阪国際音楽コンクール第1位。

第34回日本クラシック音楽コンクール第3位（最高位）。

第14回秋吉台音楽コンクール入選。ほか多数入賞。

これまでにソリストとして、関西フィルハーモニー管弦楽団、藝大フィルハーモニア管弦楽団、神戸市室内合奏団等と共演。

ヴァイオリンを木田雅子、清永あや、植村太郎、漆原朝子、玉井菜採の各氏に、ヴィオラを市坪俊彦氏に師事。



©Ayane Shindo

アルバン・ベルク（1885～1935）は、A.シェーンベルク、A.ヴェーベルンとともに「新ウィーン楽派」を代表する作曲家であり、十二音技法による作品で知られる。本日演奏する《ヴァイオリン協奏曲》は1935年、ヴァイオリニストのクラスナーの委嘱により作曲され、ある少女の死を契機に一気に書き上げられた。その少女マノン・グロピウスは、アルマ・マラー（G.マラーの未亡人）の娘であり、ベルク夫妻にとっても親しい存在であったが、感染症により18歳でこの世を去った。本作には「ある天使の思い出に」という献辞が付されており、その「天使」とは彼女を指す。なお、この献辞をめぐるのは、ベルクの死後に明らかとなった私生活上の問題や作品の官能的な響きと相まって、マノンとの特別な関係を推測する見方もあるが、ここでは家族同然の存在であった彼女への追悼として捉えたい。ベルク自身も同年、虫刺されに起因する敗血症により急逝し、同時期に取り組んでいた歌劇《ルル》は未完のまま残された。本作は彼の生涯最後の完成作品である。

全曲を通して十二音音列が用いられているが、この音列は三度の積み重ねと全音音階を基盤としており、無調でありながらも協和的な響きを感じさせるのが特徴である。さらに音列の終わりの4音は、第2楽章中盤に引用されるバッハのコラール《Es ist genug》冒頭の音型と一致し、作品全体に象徴的な意味を与えている。

第1楽章（Andante - Allegretto）は二部構成である。前半のAndanteは、ヴァイオリンの開放弦を生かした静かな序奏に始まり、音列のモチーフが繰り返し現れる。後半のAllegrettoでは、「ウィーン風に」と指示された舞曲的な音楽が展開し、終盤にはケルンテン地方の民謡が引用される。楽章全体を通して、マノンの生前の姿やその面影が描き出されているかのようである。

第2楽章（Allegro - Adagio）もまた二部から成る。前半のAllegroは、鋭いヴァイオリン独奏によって開始され、続く符点リズムが苦悩や闘病のイメージを想起させる。やがて激しい展開の中にバッハのコラールが現れると、音楽は一転して後半のAdagioへと移り、祈りに満ちた静謐な世界が広がる。オーケストラと独奏が一体となって旋律を紡いだのち、第1楽章の民謡が回想され、天へ昇るかのようなコーダで曲を閉じる。

本日はモーニング・コンサートにご来場いただき、誠にありがとうございます。かねてより魅了されてきたベルクの協奏曲をこの舞台で演奏できることを、大変光栄に思います。指揮の山下一史先生、藝大フィルハーモニア管弦楽団の皆さま、日頃よりご指導くださる先生方、本公演を支えてくださったスタッフの皆さま、そして奏楽堂の事故以降も開催にご尽力くださった多くの関係者の皆さまに、心より御礼申し上げます。

（戸田 記）

◆坂本郁生（4年：ピアノ）SAKAMOTO Ikuo

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第1番 嬰へ短調 作品1（演奏時間約27分）

熊本県出身。2003年生まれ。4歳からピアノを始める。第54回熊日学生音楽コンクールピアノ部門高校生の部 最優秀賞。第28回宮日音楽コンクール ピアノ部門 高校 最優秀賞。第24回ショパン国際ピアノコンクール in Asia 大学生部門 全国大会 金賞。アジア大会 銅賞。第30回おきでんシュガーホール新人演奏会オーディションにて優秀賞を受賞し、演奏会に出演。これまでに、宮下むつみ氏、吉岡菜月氏、智内威雄氏に師事。熊本県立第二高等学校を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科4年在学中。有森博氏に師事。



セルゲイ・ラフマニノフ（1873-1943）はロシアを代表する作曲家の1人であるとともに、ピアニスト・指揮者であり、その作品は豊かな旋律美と深い叙情性、重厚な和声が特徴である。また、自身の卓越した技巧や、その体格の大きさ、手の大きさなどが反映されたピアノ作品で知られる。

彼のモスクワ音楽院時代、17歳ごろからこのピアノ協奏曲第1番は着手され、従兄であり、素晴らしいピアニストでもあったアレクサンドル・ジロティに献呈されている。完成後の1892年3月12日にラフマニノフ自身がソリストを務め、学生オーケストラをバックに第1楽章が初演された。

初稿から約25年後、1917年に大規模な改訂が行われ、若きラフマニノフの輝かしい音楽を残しつつオーケストレーションやピアノ書法をより洗練し、調整された改訂版となった。今回同様、現在では主にこの1917年改訂版が演奏されている。

第1楽章 Vivace

冒頭は、ファンファーレからピアノの鮮烈で力強いオクターブパッセージを繰り広げる。その後オーケストラから始まる、哀愁を帯びて厚く歌い上げられる第1主題がピアノに引き継がれる。対照的に現れる第2主題は抒情的で甘美な性格を持ち、ピアノが装飾的に輝きを加えてそれに答える。展開部では主題が変容していき、緊張感を高めながら斬り込むようにピアノのカデンツァに突入しコーダへと向かう。ソナタ形式の中に若きラフマニノフの情熱が詰まった楽章で、ピアノは華やかな技巧を駆使しながらオーケストラと緊密に絡み合う。

第2楽章 Andante

静かで夢見るような世界が広がる緩徐楽章。穏やかな伴奏の上に、ピアノソロが繊細で歌うような旋律を紡ぐ。ラフマニノフ特有の深い抒情性がすでに確立されていることがうかがえる。中間部ではやや高揚した表情を見せるが、全体は静かな余韻を保ったまま終結する。

第3楽章 Allegro vivace

終楽章は軽快で躍動的な主題によって始まり、華麗な技巧とリズムカルな推進力が際立ち、ピアノとオーケストラとの活発な掛け合いを展開する。変拍子による独特なリズム感も特徴である。

中間部ではラフマニノフらしく叙情的な曲調に変化し、緩やかに掛け合いをする。そしてすぐに再び活気ある音楽へと回帰し、全体を通して若々しいエネルギーが満ちている。最後は輝かしいクライマックスで締めくくられる。

最後になりましたが、本日はモーニング・コンサートにお越しくださりありがとうございます。

憧れだったラフマニノフのピアノ協奏曲を、また、僕にとっては初めてのオーケストラとの共演をこのような舞台上で演奏できることをとても幸せに思います。

指揮の山下一史先生、藝大フィルハーモニア管弦楽団の皆さま、ご指導くださった先生方、この演奏会のためにご尽力いただいた沢山のスタッフの皆さま、そして本日演奏を聴きに足を運んでくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。

（坂本 記）



©ai ueda

1977年桐朋学園高校音楽科に入学。チェロを井上頼豊氏に、指揮を尾高忠明、小澤征爾、秋山和慶、森正の各氏に師事。1984年桐朋学園大学を卒業後、ベルリン芸術大学に留学。1986年ニコライ・マルコ国際指揮者コンクールで優勝。1985年12月からカラヤンが亡くなる1989年まで彼のアシスタントを務めた。1986年ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会で、急病のカラヤンの代役として急遽ジーンズ姿のまま「第九」を指揮し、話題となる。以来、ザルツブルク・フィングステン音楽祭でカラヤンのスタンバイ指揮者として契約。その後、ヘルシンボリ交響楽団（スウェーデン）の首席客演指揮者を務めた。日本国内では1988年にNHK交響楽団を指揮してデビュー。オーケストラ・アンサンブル金沢プリンスパル・ゲスト・コンダクター、九州交響楽団常任指揮者、大阪音大ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団常任指揮者、仙台フィルハーモニー管弦楽団指揮者、同団正指揮者を歴任。また、東京藝術大学音楽学部指揮科教授として後進の育成にも心血を注ぐ。千葉交響楽団音楽監督、愛知室内オーケストラ音楽監督、大阪交響楽団常任指揮者。大阪音大ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団名誉指揮者。

管弦楽：藝大フィルハーモニア管弦楽団 The Geidai Philharmonia Orchestra, Tokyo

藝大フィルハーモニア管弦楽団（2016年秋、「藝大フィルハーモニア」から改称）は東京藝術大学に所属するプロフェッショナル・オーケストラで、定期演奏会のほか、声楽科との「合唱定期」、オペラ専攻との「オペラ定期」、音楽学部の「新卒業生紹介演奏会」、年末恒例の「チャリティーコンサート メサイア」（朝日新聞厚生文化事業団・朝日新聞社主催）、「台東第九公演」などを行なっている。教育面では、器楽科・声楽科学生との協奏曲等の共演および作曲科学生の作品披露を行う「モーニング・コンサート」（年13回）や、指揮科学生との演奏会・試験・演習、東京藝大ジュニア・アカデミーの生徒との協奏曲の共演などを通して、学生の演奏経験の拡充に資している。学外での活動も積極的に行っており、近年では、新国立劇場での「世界若手オペラ歌手ガラコンサート」や現代舞踊名作劇場（現代舞踊協会）の出演をはじめ、長崎県五島市、新潟県長岡市、新潟県魚沼市、秋田県秋田市、茨城県取手市でも公演を行い、いずれも好評を博した。海外では、2017年6月のチリでの4公演（日本・チリ修好120周年記念）に続き、2023年12月には、世界三大劇場の一つであるアルゼンチンのコロソ劇場（Teatro Colón）からの招聘による公演で聴衆を魅了し、15分以上に及ぶスタンディングオベーションを受けた。また2024年12月には、ヴァイオリンの巨匠ジェラルド・プーレ氏と共に、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲のCD録音を実施した。（公社）日本オーケストラ連盟準会員。



ソロ・コンサートマスター
植村 太郎 ◎

コンサートマスター
澤 亜樹
對馬 佳祐

第1ヴァイオリン

荒井 友美
生田 絵美
加藤えりな
金子 芳子
河野由里恵
佐原 敦子
菅谷 早葉
西田 史朗
前田 奈緒
増尾 朗子
小寺 麻由 *
林 千夏 *
本郷 幸子 *
守田 マヤ *
吉成とも子 *

第2ヴァイオリン

村津 瑠紀 ○
山本 有紗 ○
清岡 優子
小暮 莉加
小杉 結
野田 良子
福井 彩花
福岡 雄也
マヤ・フレーザー
宮本 有里
荒木 優子 *
久保 喜枝 *
菅谷 史 *
花房 照子 *
丸山 怜子 *
矢黒 花枝 ◆

ヴィオラ

安藤 裕子 ○
吉田 篤 ○
阿部 哲
梶岡 弥生
中川玲美子
麻柄明日香
森 朱理
柘植 藍子 *
沼田 由恵 *
本田 梨紗 *

チェロ

羽川 真介 ○
山澤 慧 ○
寺井 創
豊田 庄吾
夏秋 裕一
松本 卓以
薄井 信介 *
岡本 渚 *
鈴木 穂波 *
森 義丸 *

コントラバス

赤池 光治 ○
長坂 美玖 ○
倉持 敦
小室 昌広
有村 航 *
陳 子沛 *

フルート

細川 愛梨
山本 葵

オーボエ

戸田 智子
山田 涼子

クラリネット

濱崎 由紀
春田 傑
三界 秀実 *
岡本 昇大 *
平山 諒 ◆
XU KE ◆

ファゴット

坪井 祐樹
宮崎 寿理
加藤 秀一 *
笹崎 雅通 *

サクソフォン

山本 航司 *

ホルン

谷 ひな子 ○
岡村 陽
堂山 敦史
梁川 笑里
直田 真潮 ◆

トランペット

平山あかり
星野 朱音
朝日 愛理 ◆

トロンボーン

東川 暁洋
久保田和弥
今村 岳志 *
廣田 純一 *

テューバ

松田 隼 *

ティンパニ&パーカッション

井手上 達
ニツ木千由紀
山内創一朗 *
村田 倫樹 ◆

ハープ

湊 あゆみ ◆

楽団長

福中 冬子

事務局長

酒井 敦

事務局長次長

小宮山雄太（チーフ・ステージマネージャー）
小久保綾子（チーフ・ライブラリアン）

インスペクター

葛谷 拓摩

ステージマネージャー

森本 直通

アシスタント・ステージマネージャー

徳永 芽久

ステージスタッフ

神山 巧弥

ライブラリースタッフ

安田 沙織
廣田 碧
小林 世佳

演奏活動強化担当

足立 優司

庶務

野村 智行
松井 勝幸

発行：2026年6月18日(木) 東京藝術大学

編集：東京藝術大学音楽学部

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

お問い合わせ：東京藝術大学演奏芸術センター

TEL 050-5525-2300

※無断転載・複写・引用などを禁じます

◎：コンサートマスター（本公演）

○：首席奏者

◆：賛助出演

＊：本学学生